史遊会通信

No. 211
平成24年
7月15日
発　行

事務局
☎（03）
3712-0651
下山田方

六月講演要旨

「蝦夷国界」はどこか

平山　善之

多賀城は仙台市の東北十二キロのところにある。昭和の発掘調査で八世紀前半の創建と確認された。この地から、江戸初期、一つの石碑が掘り出された。多賀城碑である。

多賀城碑の碑面は、上部中心に「西」と大書され、その下に次の様に刻まれている。

多賀城　去京一千五百里
　去蝦夷国界一百廿里
　去常陸国界四百十二里
　去下野国界二百七十四里
　去靺鞨国界三千里
此城神亀元年歳次甲子按察使兼鎮守将軍従四位上勲四等大野朝臣東人之所置也天平寶字六年歳次壬寅参議東海東山節度使従四位上仁部省卿兼按察使鎮守将軍藤原恵美朝臣朝獦修造也
　天平寶字六年十二月一日

「蝦夷国界」とはどこか。現在の尺度で言えば約六十キロと、多賀城から近い。この碑を読んだ当時の人々が、すぐ肯ける所であった筈である。

通説は岩手県一関市近辺とする。

私は昨年九月、歴博の平川館長にお尋ねした。館長は言下に「一関近辺です。」と、疑う余地無しという口調で答えられた。

平川館長は、多賀城発掘調査に携わったこ

例会のお知らせ

◎7月例会
日　時　平成24年7月25日（水）
　午後6時～8時
会　場　目黒区民センター　7階
　社会教育館　第2研修室
講　演　和田肇允氏
テーマ　地震と建築
自由執筆　鍋屋次郎・中山喬央・
　中込勝則の諸氏
締　切　8月20日　厳守

◎8月例会はお休み

◎9月例会
日　時　平成24年9月26日（水）
　午後6時～8時
会　場　目黒区民センター　7階
　社会教育館　第2研修室
講　演　佐藤健一氏
テーマ　未定
自由執筆　太田精一・森下征二氏
締　切　9月30日　厳守

とから研究生活に入られた専門家である。

しかし私は福島県伊達郡国見町であると考える。以下その理由である。

一、蝦夷観念の成立と国造制

「大化改新の段階で倭王権が国造制の施行された外側の住民を蝦夷として把握していた。」（今泉隆雄）「国造制は、六世紀前半から半ばの時期にかけて成立したとみられるが、これにともなって蝦夷観念が形成されたとみるのが、もっとも可能性の高い想定のように思われる。」（熊谷公男・「蝦夷の地と古代国家」山川出版社）私も賛成である。

陸奥国の国造は「国造本紀」によれば道奥菊多・阿尺（安積）・思（亘）・伊久（伊具）・染羽（標葉）・浮田（宇多）・信夫・白河・石背（石瀬）・石城の十国。亘理、伊具（現在の角田市）が最北という。

「伊具・亘理の両地域こそ遡れば国造制の北限地帯。つまり伊具・亘理の両地域は蝦夷地の南限にして境界の要地にも相当した。」（菅野成寛「古代蝦夷と律令国家」高志書院）

二、朝獦（建碑者）の心境

律令国家が陸奥と名付けたこの土地は地の果て、辺境であった。西方の人から見れば、フロンティアであり化外の民のすむ土地であった。大和朝廷は多賀城以下、次々に拠点を設け、律令国家に編入していった。

しかし朝廷が「蝦夷」と呼んだ原住民の大半は追われて逃げたわけではなく依然として住み続けていた。点と線を抑えても面は蝦夷達のものであった。通説論者は、多賀城・胆沢城と拠点ができるたびに、地図が塗り変わるように国境線が北上した、と誤解してはいないだろうか。朝獦より三十年も後に征夷大将軍坂上田村麻呂が対蝦夷戦争の本陣を置いたのは多賀城ではなく、下総の印旛郡であった。即ち多賀城は蝦夷勢力圏の真中であり、大和勢力の内側ではなかった。

蝦夷の勢力圏に深く進み入って多賀城という拠点を東人が造り、そして朝獦が大修築を施したということを誇るためにこの碑は建てられた。陸奥国という正式国名でなく、「蝦夷国」と表現したのは蝦夷の勢力圏ということを表わしたのではなかろうか。また靺鞨国などという誰も知らぬような外国の地名を刻んだことも、この地が辺境であることを知らせる道具立てであろう。

通説は、「鎮守将軍として蝦夷を平らげた功績を誇る為に立てたのだから、多賀城が未だ蝦夷国というのはおかしい。」という。しかし、普通に城（国府）を改修しただけで碑を建てるだろうか。「蝦夷国」の中で、これだけの仕事をしたからこそ誇らしげにこの碑を建てたのではなかろうか。

三、安倍・清原・藤原氏の出自

彼等は蝦夷である。

前九年、後三年の役で主役を演じた安倍・清原、そして平泉に拠って覇を唱えた藤原、いずれも原住民である。「陸奥話記」や「中尊寺願文」などには「東夷の酋長」「俘囚の上頭」などと書かれている。決して西から来て国府に勤務した官僚が土着した者達などではない。安倍は阿倍比羅夫の、平泉藤原は藤原秀郷の後裔だというが、いずれも信用しがたい。藤原経清は安倍頼時の婿であり、子が平泉初代の清衡である。清衡は清原家で成長する。三家はいわば一族である。

安倍貞任は廚川次郎といった。廚川は盛岡の北である。藤原経清は亘理権大夫といい、阿武隈川河口の亘理郡領であった。伊具郡領は平永衡といい同じく安倍頼時の婿である。北上川中流域と阿武隈川河口域をおさえた蝦夷は広域連合を組んでいた。

八、九世紀は蝦夷の豪族の名前は、「伊治公呰麻呂」とか「大墓公阿弖流為」等といっ

た。それから百年をへて国司の衰亡とともに行政権を握った俘囚長たちは、大和風の苗字を持つに至る。安倍氏は「貞観の頃、鎮守将軍たりし安倍比高らと結びついたのではないか。」（新野秋田大教授）また清原氏は「元慶の時、秋田城司となった出羽権掾清原真人令望と親近の関係になったらしい」。（同。「俘囚長と藤原氏」）

四、貞任、泰衡の防衛線・国見山

福島県伊達郡国見町。伊達というのは、出で立つの意という。国境にふさわしい。

古くは阿津賀志山と表記された厚樫山は別名「国見山」といい、現町名になった。

国見山、国見岳（嶽）は全国各地にある。いずれも六十余州の国境にある。しかし白河以北が陸奥国。その真ん中にある厚樫山が国見山というのは変である。私は、「蝦夷国」が見える、という意味の国見山ではないかと考えている。

「義経記」には、金売り吉次の話として、前九年役の時、安部貞任は阿津賀志山で源頼義等と戦ったという話を載せている。頼義は十一万の大軍で攻めても落とせず、七年間もここで戦ったという。

更に一四〇年ほど後、源頼朝は大軍を動員して奥州征伐に赴く。彼は独立王国・平泉の征服なくして日本統一はあり得ない、と認識していた。義経を匿ったから攻めたのではなく、平家在世中から平泉攻略を意図していた。

泰衡は義経の首を献上して和平を保とうとしたが、叶わずとみて防衛線を布いたのが阿津賀志山である。（「吾妻鏡」文治五年八月）二重の堀の跡が今に残っている。義経記の記述が真実とすれば、その防衛力を頼みとしたであろう。白河以北が平泉領といっても、最後の防衛線は、遠く七、八世紀頃から先祖伝来、蝦夷の国とみなされてきた国境線だったのであろう。

五、国境線にふさわしい地形

およそ国境というものは、山や川という天然の障害が境目をなしている。福島県伊達郡国見町の厚樫山と阿武隈川は国境にふさわしい。蔵王山脈が福島盆地に消え、東は阿武隈山地がせまり、あらゆる交通路が縄を綯うごとく集中する。昔の東山道、現在の国道四号線、東北本線、新幹線、東北自動車道、全て幅一キロ以内を通っている。新幹線は厚樫山の下を長いトンネルで走り抜ける。多賀城からの距離は六十四キロ、約百二十里である。

一方、一関市は八十キロとやや遠い。一関から南で多賀城から六十キロの辺は仙台平野の北部、広い水田が続く。境界線を引ける雰囲気は無い。

六、碑面にある「西」の意味

碑の最上部に大書されている「西」の意味であるが、定説はない。

古田武彦は「五つの界からの距離は、すべて西に向って測ることを指示したものだ」と唱えている。私も上述の理由からその説に賛成である。

七、むすび

以上五つの理由から、「蝦夷国界」は福島県伊達郡国見町辺にあったと考える。

多賀城の碑は江戸初期に掘り出されるまで土中に埋まっていた。発掘当時から真贋論争があったが、明治期に東大、京大の教授や有名書家が贋物と断じたため、それが通説となり、まともに研究する者もなかった。昭和三十年代以降多賀城発掘調査の結果、本物とする説が通説となった。

「通説」は変わるのである。

自由執筆

須賀川市西川〈北別所〉

柴田弘武

私は全国の別所地名を探訪して、そこが古代王権の〝蝦夷征伐〟による蝦夷（えみし）の捕虜（俘囚）を移配したところであり、彼らがその地に配置させられたのは、当該地周辺における製鉄・鍛冶（水銀、その他の鉱産資源の場合もある）をはじめとした鉱工業生産に従事させるためであった、という仮説を展開しました（拙著『全国「別所」地名事典』二〇〇七年刊）。

ところでその本の出版後、新たに二か所の別所地名を発見しました。その一つが表題の別所で、『角川地名大辞典』の小字一覧を見直していて見つけたものです。そこで今回はその別所の特色を記させていただきます。

須賀川市は、福島県の中通り、阿武隈川に沿った要地であり、かの松尾芭蕉も「奥の細道」の途中滞在した地としても有名です。

西川は市の西部、かつては山寺村と言われていました。釈迦堂川が阿武隈川に合流する手前であり、東北自動車道須賀川インターチェンジがある所です。現在はニュータウンの造成が進んでいて景観は激しく変貌しつつありますが、小字北別所はその西川地区の北端で、まだ開発をまぬがれ、畑地と山林が広がっています。須賀川市教育委員会発行の『須賀川市史　文化と生活』に、「（山寺）の『別所』は、蝦夷の捕虜を移住開拓させた所という。村の北部にあり江戸時代までは共有地、明治になって官有地。斃死馬の捨場であった」とあります。もって一種特有の歴史を有していた地であったことがうかがえるようです。また隣接する西側の小字は隠久保（かくれくぼ）であり、広い窪地になっており林野です。「隠れ」の地名も由緒ありげのようです。この別所になぜ「北」が冠せられるのかは、現地で聞いてもわかりませんでした。あるいはその南方、泉崎村別所の北方にあることの故でしょうか。

ところで山寺村の村名はこの地に米山寺（べいさんじ）という古刹があったことによります。『日本歴史地名大系　福島県』の「米山寺」の項に、「釈迦堂川北岸の河岸段丘南東縁辺部にある古代寺院跡。寺域にある日枝神社（もと山王権現）裏山で発見された平安時代の経塚群から出土した経筒外筒の銘文から存在が明らかになった。（中略）奈良時代前期以前の創建と考えられる。『白河風土記』に、二階堂盛義後室の乳母高橋菊阿弥が須賀川北町に慶長三年（一五九八）再興した薬師寺の本尊として米山寺の薬師像を移したとみえるから、この頃までは存続していたとみられる」とあります。

その経塚の一つから、「承安元年（一一七一）八月二八日」の銘文がある経筒が発見され、平安末期の信仰が確認されました。現在跡地は国史跡に指定されています。なお別所と経塚が関連する所は、京都市花背別所など他地区でも数例存在しています。

日枝神社の祭神は大山咋命、比叡山延暦寺座主円珎智証大師の貞観年中の勧請、と「縁起」にあります。米山寺の別当社で、境内には今も薬師堂が残っています。

ところで、当地は大化以前の石背国の地とされ、国造は『国造本紀』によると建許呂（たけころ）命の児、建弥依米（たけみよりめ）命です。須賀川市新町にある御炊館（おたきや）神社は建弥依米命・建許呂命・須佐男之命を祭神としています。社名は建弥依米命が当地に下向し、国造の任務を全うできるよう新穀を炊いて捧げ天神地祇に祈願したという故事に由来しているとされています（同名

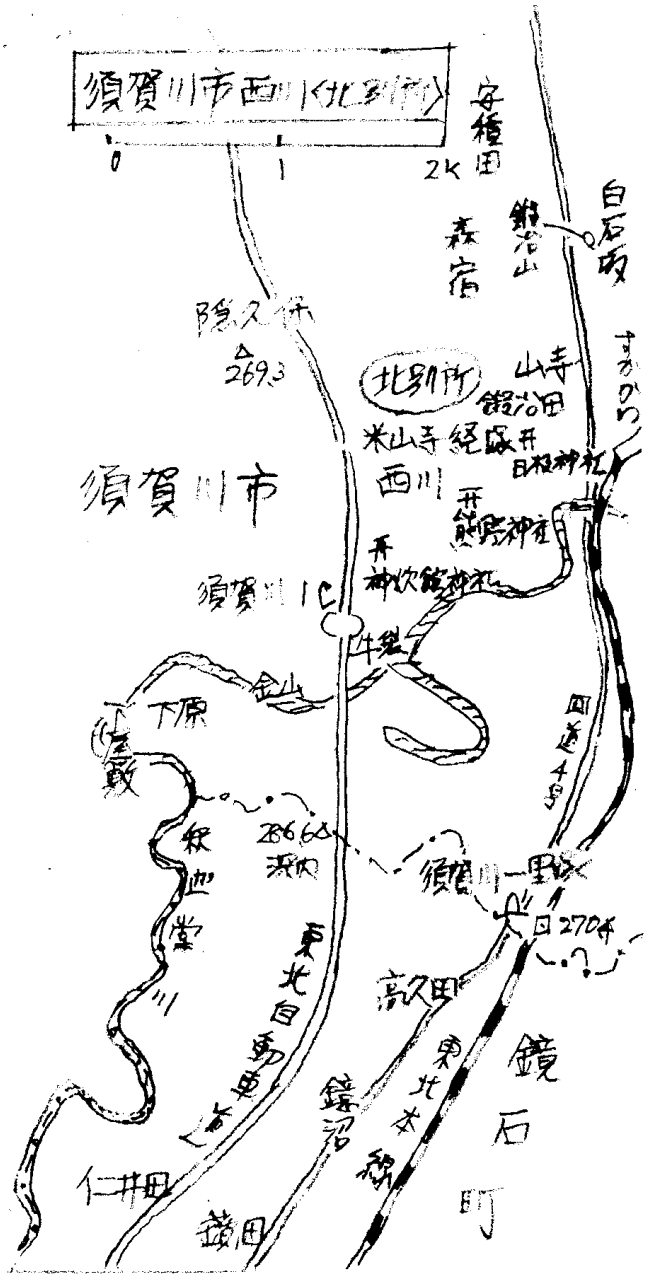
の神社は諏訪町にもあります）。本社は元は釈迦堂川畔（現在地の東五〇〇㍍にあったが、河川改修工事で水没）にあって、西川村の鎮守です。

その建弥依米命の父建許呂命は岩城国造であり、道奥菊多国造や道口岐閉国造も建許呂命の子とされています。また『常陸国風土記』によると多祁許呂命（＝建許呂命）は茨城国造の初祖ともあり、その一族は師長・馬来田・須恵・印旛など国造でもあるので、神奈川・千葉・茨城・福島の太平洋沿岸諸国（石背国のみ例外）を支配した一族であることが推察されます。そのタケコロの系譜を辿ると、神武天皇の子である神八井耳命であり、それはまた多氏一族に繋がります。私はそのオオ氏は産鉄族と捉えているので、この地もすでに五～七世紀頃の産鉄地であったと推定できると思っています。

ではこの北別所の周辺ではどうだったのでしょうか。米山寺跡のある小字坂の上に南接する小字に内屋敷があります（北別所の東南一キロ弱）。『須賀川市史　自然・原始・古代』に、「市内大字西川字内屋敷のかんじんまど遺跡や、鏡石町ニタ通遺跡などで平安期の鉄器製造跡が発見されている。なお市内の各所で鉄滓がみられるが、この時期はさらに下るようである」と書かれています。鏡石町は須賀川市に南接する町ですが、その仁井田地区（北別所の西南五キロ）について『地名大辞典』は、「製鉄あるいは鍛冶工房跡と推定される林合・ニタ通りの二遺跡がある。林合遺跡から住居跡一〇軒と多量の鉄滓・羽口などが検出され、ニタ通り遺跡からは住居跡・工房跡が検出された。いずれも奈良期～平安期のものという。鏡田地区にも八世紀頃の集落跡である仏具壇遺跡があり、仁井田地区を中心とした釈迦堂川東岸には、鉄生産に関連した集落の存在も予想される」と書かれています。明らかに俘囚移配時期である八～九世紀にはこの地で鉄生産が行われていたことがわかります。

西川村の小字にも金山・金子田・鍛冶田・大袋（袋は吹く炉とも読める）などがあり、隣村は牛袋村で、金工を暗示する地名が散見されます。

この地の別所も他の別所と共通する要素を備えていると言えましょう。



自由執筆

鹿屋

瀧澤　中

昭和二〇年五月。鹿児島海軍串良飛行場。愛機の横で若者たちがお茶会をしていた。

「貴様、おふくろに会いたくないか」

二十二歳の千政興（千玄室）は、かたわらにいた親友の西村晃に尋ねた。

「会いてぇよ」

千は、

「みんな、故郷の方を向いて『お母さん』と呼んでみようじゃないか」

そう言うと千は立ち上がって京都の方を向き、

「おかあさーん！」

と叫んだ。そんな女々しいことができるか、という顔をしていた隊員たちが、次々に自分たちの故郷に向かって、

「おかあさーん！」

と叫び出した…。

今回、鹿屋にいる畏友の案内で、鹿屋周辺から知覧や万世など、特攻に関連する施設を回らせてもらった。冒頭の話は、鹿屋に近い串良飛行場での情景で、現在は異様に長い道路（滑走路跡）と、慰霊塔が建っているだけである。　串良には、地下壕電信司令室が残っていた。なんと、普通の民家の敷地内（民有）で、状態は良好ではないが、すべて見学ができた。

この場所で、特攻機からの最後の打電を受けた。通常、いよいよ突っ込む時には「ト連送」（我レ今ヨリ突入ス）を打つが、鹿屋航空基地資料館のS氏によれば、

「オカアサン、オカアサン、オカアサン…」

という打電が少なくなかったという。

鹿屋基地の西、野里に、「桜花」出撃の地がある。川端康成や山岡荘八らが報道班員として滞在していた。司令の岡村基春大佐は隊員たちに対し、出撃以外、外出も自由勝手にさせ、「私も必ず後から行く。みんな元気で行け」と言って送りだした。野里には悲壮感がなかったと、山岡ら滞在していた者たちが述べている。

「特攻は死ぬことが目的ではない」

という岡村だったが、脱出不可能な攻撃機・桜花の司令となり、いかに無駄死にをさせないか、ということを最優先に考えた。

戦後、岡村は隊員の遺族を一軒一軒回り、一通り終えて、昭和二十三年に自殺。

彼らは、自分以外の誰かを救うために死んでいった、そしてそれを忘れない限り、歴史は繰り返さないのだと、信じたい。

鹿屋航空基地は、戦後、海上自衛隊の航空基地として現在に至っている。

昭和三十七年。まだ飛行場のなかった奄美大島で緊急輸血が必要となり、要請を受けて鹿屋基地から海上自衛隊機が出動。血液を無事落下させるため、低高度で島に進入し、そのまま山腹に激突。十二名の乗組員と一名の島民が死亡。島民一名が巻き添えになったにもかかわらず、「善意に満ちた愛の行為」として、島では隊員慰霊の記念碑を建てた。

戦後も、「自分以外の誰かを救いたい」という心は、生き続けている。

特攻隊員たちは、さまざまなものを持って出撃した。手紙や写真や慰問品。そして、お守り。そのお守りは、高級な生地でできていた。隊員たちが大切に握りしめていたお守りは、母から貰ったものであった。

「せめて、死に際は一緒にいてやりたい」

母親たちは、自分が一番大切にしていた着物で、お守り袋をつくった。

若桜春をも待たで散りしゆく

嵐の中に枝を離れて

自由執筆

木下籐吉郎の子飼いの家臣たちのその後
その一　「堀尾茂助吉晴」

隆　恵

私が歴史を好きになった契機は、受験勉強時代に読んだ吉川英治の太閤記であった。受験勉強の息抜きには、籐吉郎の「明るい未来を夢見て、常識外れの知恵でどんな事にもめげずに道を切り開く」姿に憧れたからである。

日本の戦国時代の英雄は、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の三人に代表されるが、この三人の対照的な人物像と功績の多寡と好感度については長年語られてきた。

私の好感度ベストワンは、山崎の戦いまでの木下籐吉郎秀吉であり、嫌悪度ワーストワンはその後の太閤秀吉である。

永年、ＮＨＫの歴史ドキュメント番組のファンであるが、その番組の最後に語られる僅か数分の「その後」に一番興味がある。それは「その後」についてほとんど知らないからである。そこで、好感度ベストワンの標題でシリーズ形式にて述べたい。

第一回は、おそらく足軽時代の籐吉郎の最も初期の子飼いと思われる堀尾茂助吉晴の「その後」とした。先年、島根県の松江市を旅行した時に、松江藩の初代藩主として彼の名前があり、二十四万石の太守にまで出世したのかと驚いた記憶がある。

なお、標題の代表格は加藤清正や福島正則であるが、彼らは吉晴より十七才程年下なので、活躍の時期と場に時代差がある。

（一）　木下籐吉郎時代

堀尾家は、元々は尾張の守護斯波氏の守護代であった岩倉織田家（織田家の宗家、信長の織田家は傍流）の重臣の家柄であったが、吉晴が十五才前後のときに信長に滅され、主家の滅亡後は、信長に仕官後木下籐吉郎の配下に入る。未だ籐吉郎が足軽大将時代の二十五才前後のときに十八才程度で仕える訳で、正に部下数名の秀吉の草創期の子飼いである。籐吉郎より十才程度年長の川並衆の蜂須賀小六正勝や前野長康は、当時は子飼いではなく客分扱いだった。因みに、山内一豊も同じ岩倉織田家の宿老の家柄だったが、一豊が籐吉郎の部下となるのは八年程の流浪の後なので、吉晴には遠く及ばぬ遅参組であった。

この時代に吉晴が登場するのは、美濃攻めの稲葉山城攻略の糸口となる城内への間道を彼が探して先導する大殊勲を上げる有名な話である。その後は、武勇に優れた彼は幾多もの勲功を上げたに違いないが、具体的な記録はない。

その後、歴史の表舞台に登場するのは、籐吉郎の中国攻めの備中高松城の城主清水宗治の湖中での自決の検死役である。時は本能寺の変の直後の明智光秀との山崎の決戦の直前であり、籐吉郎の配下となって二十年経過の三十八才のときであった。主人の籐吉郎は未だ一大名に過ぎなかったが、石高は三千五百石の高禄取りに出世をしていた。山崎の合戦では先陣の鉄砲組を勤めて殊勲を上げる。

（二）　豊臣秀吉時代

籐吉郎が天下人として出世街道をばく進し始めるや、若狭国高浜二万石の大名に、そして近江国佐和山四万石に、更に北条氏討伐後の家康の関東移封に伴い、家康の永年の根城であった浜松城主十二万石の大大名に遇されて豊臣姓を賜り、秀吉晩年には五大老に次ぐ三中老の一角を占めるまでに出世する。

太閤秀吉が一五九八年六十一才で死去するや、吉晴も石田三成とはソリが合わず、家康に接近して関が原の戦いの前年、五十五才で

次男の忠氏に家督を譲り第一線を引く。息子が浜松城主十二万石を継ぐ傍ら、家康から五万石の隠居料を拝領する。

（三）　徳川時代

一六〇〇年の関が原の戦いでは、息子が東軍に参陣して戦功を上げたので、息子は出雲国富田今の松江に二十四万石の太守に封ぜられる。

吉晴は後世松江藩の初代と称されるが、実際には息子の忠氏が初代である。

この忠氏が若干二十七才で一六〇四年に早世し、僅か五才の嫡孫が後を継ぐので、その後見役として七年間松江藩の政治を行い、大坂の陣の四年前の一六一一年に六十八歳で永眠する。

その後の堀尾家は、三代目の嫡孫が一六三三年三十四才で死去、継嗣がおらず末期養子も認められず改易となってしまう。

時は徳川家光が豊臣恩顧の大名の粛清に代表される武断政治の時代であった。このため浪人が続出して由比正雪の乱等政情不安もあり、四代家綱の後見役の保科正之は末期養子を認めるなど文治政策に大きく舵を切る。

吉晴の嫡系は大名としては生き残れなかったが、その血統は松江藩や諸藩に召抱えられ、今日でも堀尾家子孫の会がある。

吉晴は武人として数多くの戦陣を潜り抜けるが、性格が極めて温厚だったので「仏の茂助」と称され、国宝松江城を築城し、松江開府の祖として城内の松江神社の主祭神の一人となっている。

以上

祝　出　版

○ 瀧澤　中著

『政治のニュースが世界で一番スッキリわかる本』

日本文芸社

定価　一四〇〇円＋税

○ 中込勝則　記

『杜甫を味わってみませんか』

（第一編　生誕～長安における苦節十年）

慕史堂文輯 ⑭

事務局だより

※7月の例会は恒例の招待講師による特別講演です。いま気になる地震のお話ですので皆さまぜひご出席ください。

※7月は下半期の会費納入月です。例会日に9000円のご入金をお願いします。

※8月の例会はお休みです。

尚8月22日（水）には顧問会議がありますので、役員・顧問の方は予定しておいてください。

※会員の活動

○柴田弘武氏

『日本古代史の論争51』（歴史読本）に〈「産鉄の民」をめぐる論争〉を発表

○正木清幸氏（友の会）

『温故創心』（明治乳業社内報）に発表

〈歴史の風化が最も恐ろしい

「森永ヒ素ミルク中毒事件は終わっていない！」〉

※会員に変動がありましたので、下期の自由執筆者の担当月が年初の発表とは異なる場合が出てきました。史遊会通信でその都度お知らせいたしますのでご確認ください。